1p40 ベンジルアルコールを含むダイマーイオンの光解離分光

(九大院理^a・分子研^b) ○井筒 弘信^a, 大橋 和彦^a, 井口 佳哉^b, 日野 和之^a, 西 信之^b, 関谷 博^a

【はじめに】ベンゼン誘導体からなるダイマーイオンは,主として電荷共鳴(CR)あるいは水素結合相互作用のいずれかにより安定化する.例えば, $[C_6H_6]_2^+$, $[C_6H_5CH_3-C_6H_6]^+$ では前者が, $[C_6H_5OH]_2^+$, $[C_6H_5NH_2-C_6H_6]^+$ では後者が支配的であることが示されている.本研究では,ベンジルアルコール($C_6H_5CH_2OH$)を含むダイマーイオン($[C_6H_5CH_2OH-Ar]^+$, $[C_6H_5CH_2OH-C_6H_6]^+$, $[C_6H_5CH_2OH]_2^+$)において,どちらの分子間相互作用が優勢であるかについて明らかにする.

【実験】イオンビームガイド型の光解離分光装置を用いて、赤外領域(3100-3800 cm⁻¹)の振動スペクトルを測定した。また、飛行時間質量選別法を利用した光解離分光装置を用いて、近赤外領域(750-1400 nm)の電子スペクトルを測定した。

【結果と考察】図1に[$C_6H_5CH_2OH-C_6H_6$]†および[$C_6H_5CH_2OH$] $_2$ †のOH伸縮振動領域のスペクトルを示す。[$C_6H_5CH_2OH-C_6H_6$]†においては、3662 cm 「付近にシャープなバンドが観測された。この振動数は、[$C_6H_5CH_2OH-Ar$]†の光解離スペクトルにより得られた[$C_6H_5CH_2OH$]†のOH伸縮振動数とほぼ一致しており、ベンジルアルコールのOH基は、ベンゼンの π 電子と相互作用していないことを示している。一方、[$C_6H_5CH_2OH$] $_2$ †のスペクトルにはOH伸縮バンドは観測されなかった。図2に[$C_6H_5CH_2OH-C_6H_6$]†および[$C_6H_5CH_2OH$] $_2$ †の電子スペクトルを示す。縦軸は[C_6H_6] $_2$ †の吸収極大(920 nm)に対する相対断面積を示している。[$C_6H_5CH_2OH-C_6H_6$]†においては、950 nm付近にCR相互作用に基づく吸収帯が観測された。しかし、[$C_6H_5CH_2OH$] $_2$ †のCR吸収帯は観測されなかった。これらの結果から、[$C_6H_6-C_6H_5CH_2OH$]†では、ベンジルアルコールとベンゼンは水素結合しておらず、CR相互作用が支配的であるといえる。また、[$C_6H_5CH_2OH$] $_2$ †においては、水素結合相互作用が支配的であると考えられる。

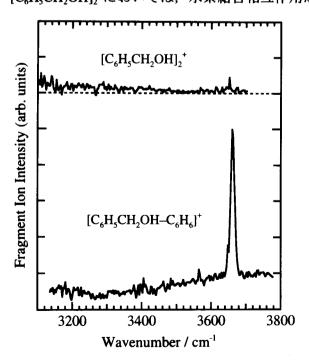


図1 OH 伸縮振動領域の振動スペクトル

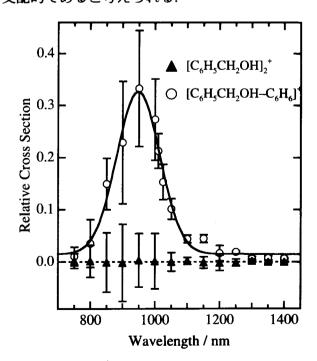


図2 CR 吸収帯領域の電子スペクトル